

病院だより No.19

『初めての在宅診療 ～祖母がくれた贈り物～』



昨年10月より、町立病院外来に勤務しております看護師の佐久間です。  
私が看護師を目指す事になったのは、高校生の時に父から言われた「お前は何の役にも立たない人間だな」という衝撃の一言でした。確かに両親に支えられて日々過ごしていた私が真剣に進路を考えた結果が看護師の道でした。当時、「キツイ」「汚い」「危険」

という過酷なイメージを持つ看護の道を選ぶのは覚悟のいることでした。  
東京の看護学校を卒業後、埼玉県某の病院で勤務し、そこである患者様との出会いがきっかけで高齢者の方と接する事が楽しくなり、北海道に戻って来てからは地元江別市にある療養型の病院に13年間お世話になりました。そこでの看護は、主に看取り医療が中心

で、予防医療や地域医療に興味があり、縁あって天塩町立病院に勤めることになってからあつという間に9か月が経ち、在宅診療にも携わらせていただいております。  
私自身、認知症のある祖母と同居し介護する機会がありました。  
看護師という立場から介護に対する抵抗はありませんが、自宅での介護は想像以上に体力と忍耐力が必要でした。同じことを何度も繰り返したり、糖尿病の持病があったため身体のかゆみが強く、布団の中に虫がいると勘違いして布団の綿を取り出し、ベットの上进行けにしたり、一人トイレに行きたくとも難しくなっていました。入れ歯をどこに置いたかわからなくなり、愛犬が見つけてくわえてきた光景は、今でも忘れられません。  
介護は家族みんなで協力していましたが、主に中心となる介護者は母で、10か月間で体重が7kg減ってしまいました。そんな時、特別養護老人ホームに入所できる事になり、母は介護に疲れ切っていたにも関わらず「もつと一緒に暮らしたかった」と涙を流していました。この在宅経験は、これから在宅診療に役立てるための祖母が私に残してくれた贈り物です。

不思議なこと  
に祖母の故郷は  
天塩町で、5年  
前に他界しまし  
たが、この地で  
がんばることをきつ  
と喜んでくれてるだろうと勝  
手に思っています。  
在宅診療での関わりは初めての経験で、慣れないこともたくさんあり、患者様やご家族と接している中で大変だろうと想像しているケースもあります。ですが、一生懸命に、そして熱心に介護されている家族の方を見ると、暗いイメージが付きまといがちの介護でも「人をたくましく成長させ絆を強めるものでもある」と実感させてくれます。  
介護者によく言われる介護の基本は「一人で抱えないこと」とあります。天塩町はとても介護サービスマスが充実した地域だと思います。介護サービスを活用しながら介護する人や受ける人、皆さんが笑顔でいられるように私自身少しでもお役に立てるよう精一杯努力していきたいと思えます。

(文責：町立病院看護師 佐久間 英子)



【問い合わせ先】天塩町立国民健康保険病院 ☎ (2) 1058